編集後記

日本で最も紹介されている現代ギリシャの小説家と言えば、ニコス・カザンザキスとヨルゴス・セオトカスでしょう。2017 年 11 月 26 日に京都大学で開かれた《カザンザキス没後 60 周年フォーラム》では、本会にも所属される福田耕佑さんと藤下幸子さんがそれぞれ「カザンザキスと『東方』」「『キリストは再び十字架にかけられる』出版によせて」の題で講演されました。残念ながら私は出席できませんでしたが、出席者も多く盛況で有意義な催しだったと伺っています。

今回「プロピレア」にも、高度に専門的な石岡さんの言語分析に加えて、カザンザキス、イオン・ドラグミス、ナポレオン・ラパシオティス、ヤニス・リッツォス、ニコス・ガッツォス、アシナ・パパダキ、ヴァシリス・ダネリス（若手ミステリ作家）に関する研究、翻訳が集まりました。水谷さんは「ギンバイカ」の完結編、戸田さんはビザンツ文学者テオドロス・メトヒテスの翻訳を含むエッセイを寄せられました。今後もこのボリュームを維持しながら会の活動を続けられればと願っています。

（橘）

ひょんなきっかけで韓国文学を日本語に紹介する仕事を手伝うようになりました。韓国文学は全く門外漢ですが、おかげで韓国における海外文学の翻訳事情が少し見えてきました。

韓国語に翻訳されているギリシャ文学は日本と同様に古典文学が圧倒的に多いものの、現代文学はカザンザキスが韓国でも人気があるようです。李潤基や安定孝などが翻訳しています。正確な数字はわかりませんが、もしかすると日本語よりも韓国語の方が翻訳の作品数は多いように思えます。ギリシャ詩の翻訳は日本ほど多くはないのに対し日本でまだ知られていないアルキ・ゼイやエヴゲニオス・トリヴィザスなどによる児童文学作品が既に韓国で出版されています。（ゼイについては「赤毛のアン」の翻訳で有名な掛川泰子の日本語訳を見つけました。）

翻訳大国である隣国どうしが刺激し合いながらギリシャ文学の普及に努めていけるように、またそこで「プロピレア」が担う役割がますます重要になっていくことを期待したいと思います。

（佐藤）